

登場人物

ナレーター

夫

妻

医者

一場

◆晩秋。夫婦の会話。  
◆ナレーター、夫、妻

海浜の松が 凧に鳴り始めた。庭の片隅で 一叢の小さなダリヤが 縮んでいった。

彼は妻の寝ている寝台の傍から、泉水の中の鈍い亀の姿を 眺めていた。

亀が泳ぐと、水面から輝り返された明るい水影が、乾いた石の上で 揺れていた。

妻 「まあね、あなた、あの松の葉が この頃それは綺麗に光るのよ」と妻は云った。

夫 「お前は 松の木を見ていたんだな」

妻 「ええ」

夫 「俺は亀を見てたんだ」

二人はまたそのまま黙り出そうとした。

夫 「お前はそこで長い間寝ていて、お前の感想は、たった松の葉が美しく光ると云うことだけなのか」

妻 「ええ、だって、あたし、もう何も考えないことにしているの」

夫 「人間は何も考えないで寝ていられる筈がない」

妻 「そりゃ考えることは考えるわ。あたし、早くよくなって、シャツシャツと井戸で洗濯がしたくってならないの」

夫 「洗濯がしたい？」

彼はこの意想外の妻の慾望に笑い出した。

夫 「お前はおかしな奴だね。俺に長い間苦勞をかけておいて、洗濯がしたいとは変った奴だ」

妻 「でも、あんなに丈夫な時が羨ましいの。あなたは不幸な方だわね」

夫 「うむ」

と彼は云った。

彼は妻を貰うまでの四五年に渡る彼女の家庭との長い争闘を考えた。それから妻と結婚してから、母と妻との間に挟まれた二年間の苦痛な時間を考えた。彼は母が死に、妻と二人になると、急に妻が胸の病気で寝て了ったこの一年間の艱難を思い出した。

夫 「なるほど、俺ももう洗濯がしたくなった」

妻 「あたし、いま死んだってもういいわ。だけでも、あたし、あなたにもっと恩を返してから死にたいの。この頃あたし、そればかり苦になって」

夫 「俺に恩を返すって、どんなことをするんだね」

妻 「そりゃ、あたし、あなたを大切に、……」

夫 「それから」

妻 「もっといろいろすることがあるわ」

夫 「——しかし、もうこの女は助からない、と彼は思った。

夫 「俺はそう云うことは、どうだっていいんだ。ただ俺は、そうだね。

俺は、ただ、ドイツのミュンヘンあたりへいっぺん行って、それも、雨の降っている所でなくちゃ行く気がしない」

妻 「あたしも行きたい」

と妻は云うと、急に寝台の上で腹を波のようにならせた。

夫 「お前は絶対安静だ」

妻 「いや、いや、あたし、歩きたい。起してよ、ね、ね」

夫 「駄目だ」

妻 「あたし、死んだっていいから」

夫 「死んだって、始まらない」

妻 「いいわよ、いいわよ」

夫 「まア、じっとしてるんだ。それから、一生の仕事に、松の葉が

どんなに美しく光るかって云う形容詞を、たった一つ

考え出すのだね」

妻は黙って了った。彼は妻の気持ちを転換さすために、柔らかな

話題を選択しようとして立ち上った。

海では 午後の波が 遠く岩にあたって散っていた。一艘の舟が

傾きながら鋭い岬の尖端を廻っていった。渚では 逆巻く

濃藍色の背景の上で、子供が二人湯気の立った芋を持って

紙屑のように坐っていた。

彼は 自分に向って次ぎ次ぎに来る苦痛の波を避けようと

思ったことは まだなかった。このそれぞれに質を違えて襲って来る

苦痛の波の原因は、自分の肉体の存在の最初に於て働いていたよう

に

思われたからである。彼は苦痛を、譬えば砂糖を甜める舌のように、

あらゆる感覚の眼を光らせて吟味しながら甜め尽してやろうと

決心けっしんした。そうして最後に、どの味あじが美味うまかったか。

夫　――俺おれの身体からだは一本いっぽんのフラスコだ。何なにものよりも、先まず

透明とうめいでなければならぬ。

と彼は考かんえた。

◆初冬。鳥の臓物を買に出る夫。  
◆ナレーター、夫、妻

ダリヤの茎が干枯びた繩のように地の上でむすぶれ出した。  
潮風が水平線の上から終日吹きつけて来て冬になった。

彼は砂風の巻き上る中を、一日に二度ずつ妻の食べたがる新鮮な鳥の臓物を捜しに出かけて行った。彼は海岸町の鳥屋という鳥屋を片端から訪ねて行って、その黄色い俎の上から一応庭の中を眺め廻してから訊くのである。

夫 「臓物はないか、臓物は」

彼は運好く瑪瑙のような臓物を氷の中から出されると、勇敢な足どりで家に帰って妻の枕元に並べるのだ。

夫 「この曲玉のようなのは鳩の腎臓だ。この光沢のある肝臓はこれは家鴨の生胆だ。これはまるで、噛み切った一片の唇のようで、この小さな青い卵は、これは崑崙山の翡翠のようで」

すると、彼の饒舌に煽動させられた彼の妻は、最初の接吻を迫るように、華やかに床の中で食欲のために身悶えした。彼は惨酷に臓物を奪い上げると、直ぐ鍋の中へ投げ込んで了うのが常であった。

妻は檻のような寝台の格子の中から、微笑しながら絶えず湧き立つ鍋の中を眺めていた。

夫 「お前をここから見ていると、実に不思議な獣だね」

と彼は云った。

妻 「まア、獣だって、あたし、これでも奥さんよ」

夫 「うむ、臓物を食べたがっている檻の中の奥さんだ。お前は、いつの場合に於ても、どこか、ほのかに惨忍性を湛えている」

妻 「それはあなたよ。あなたは理智的で、惨忍性をもっていて、いつでも私の傍から離れたがろうとばかり 考えていらしって」

夫 「それは、檻の中の理論である」

彼は 彼の額に煙り出す片影のような皺さえも、敏感に見逃さない妻の感覚を誤魔化すために、この頃いつもこの結論を用意していなければならなかった。それでも時には、妻の理論は急激に傾きながら、彼の急所を突き通して旋廻することが度々あった。

夫 「実際、俺はお前の傍に坐っているのは、そりゃいやだ。肺病と云うものは、決して幸福なものではないからだ」

彼はそう直接妻に向って逆襲することがあった。

夫 「そうではないか。俺はお前から離れたとしても、この庭をぐるぐる廻っているだけだ。俺はいつでも、お前の寝ている寝台から綱をつけられていて、その綱の画く円周の中で廻っているより仕方がない。これは憐れな状態である以外の、何物でもないではないか」

妻 「あなたは、あなたは、遊びたいからよ」

と妻は口惜しそうに云った。

夫 「お前は遊びたかないのかね」

妻 「あなたは、他の女の方と遊びたいのよ」

夫 「しかし、そう云うことを云い出して、もし、そうだったらどうするんだ」

そこで、妻が泣き出してうのが例であった。彼は、はッとして、また逆に理論を極めて物柔らかに解きほぐして行かねばならなかった。

夫 「なるほど、俺は、朝から晩まで、お前の枕元にいななければならぬと云うのはいやなのだ。それで俺は、一刻も早く、お前をよくしてやるために、こうしてぐるぐる同じ庭の中を廻っているのではないか。これには俺とて一通りのことじゃないさ」

妻 「それはあなたのためだからよ。私のことを、一寸もよく思っ  
て下さるんじゃないんだわ」  
彼はここまで妻から肉迫されて来ると、当然彼女の檻の中の理論にとりひしがれた。だが、果して、自分は自分のためにのみ、この苦痛を噛み殺しているのだろうか。

夫 「それはそうだ、俺はお前の云うように、俺のために何事も忍耐しているのにちがいない。しかしだ、俺が俺のために忍耐していると云うことは、一体誰故にこんなことをしていなければ、俺はお前さえいなければ、こんな馬鹿な動物園の真似はしていたくないんだ。そこをしていると云うのは、誰のためだ。お前以外の俺のためだと

も

云うのか。馬鹿馬鹿しい」

こう云う夜になると、妻の熱は定って九度近くまで昇り出した。

彼は一本の理論を鮮明にしたために、氷嚢の口を、開けたり閉めたり、夜通ししなければならなかった。

◆夫が仕事をする事についての会話。  
◆ナレーター、夫、妻

しかし、なお彼は自分の休息する理由の説明を明瞭にするために、この懲りるべき理由の整理を、殆ど日じつしつづけなければならなかった。彼は食うためと、病人を養うためとに別室で仕事をした。すると、彼女は、また檻の中の理論を持ち出して彼を攻めたてて来るのである。

妻 「あなたは、私の傍をどうしてそう離れたいんでしょう。

今日はたった三度よりこの部屋へ来て下さらないんですもの。分つていてよ。あなたは、そう云う人なんですもの」

夫 「お前と云う奴は、俺がどうすればいいと云うんだ。

俺は、お前の病気をよくするために、薬と食物とを買わなければならないんだ。誰がじっとしていて金をくれる奴があるものか。お前は俺に手品でも使えと云うんだね」

妻 「だって、仕事なら、ここでも出来るでしょう」

と妻は云った。

夫 「いや、ここでは出来ない。俺はほんの少しでも、お前のことを忘れているときでなければ出来ないんだ」

妻 「そりやそうですわ。あなたは、二十四時間仕事のことより何も考えない人なんですもの、あたしなんか、どうだっていいんですわ」

夫 「お前の敵は俺の仕事だ。しかし、お前の敵は、実は絶えずお前を助けているんだよ」

妻 「あたし、淋しいの」

夫 「いずれ、誰だって淋しいにちがいない」

妻 「あなたはいいわ。仕事があるんですもの。あたしは何もないんだわ」

夫 「捜せばいいじゃないか」

妻 「あたしは、あなた以外に捜せないんです。あたしは、じっと天井を見て寝てばかりいるんです」

夫 「もう、そこらでやめてくれ。どちらも淋しいとしておこう。

俺には締切りがある。今日書き上げないと、向うがどんなに困るか知らないんだ」

妻 「どうせ、あなたはそうよ。あたしより、締切りの方が大切なんですから」

夫 「いや、締切りと云うことは、相手のいかなる事情をも退けると云う張り札なんだ。俺はこの張り札を見て引き受けて了った以上、自分の事情なんか考えてはられない」

妻 「そうよ、あなたはそれほど理智的なものよ。いつでもそうなの、あたし、そう云う理智的な人は、大嫌い」

夫 「お前は俺の家の者である以上、他から来た張り札に対しては、俺と同じ責任を持たなければならぬんだ」

妻 「そんなもの、引き受けなければいいじゃありませんか」

夫 「しかし、俺とお前の生活はどうなるんだ」

妻 「あたし、あなたがそんなに冷淡になる位なら、死んだ方が

「いいの」

すると、彼は黙って庭へ飛び降りて深呼吸をした。それから、彼はまた風呂敷を持って、その日の臍物を買いにこっそりと町の中へ出かけていった。

◆瘦せていく妻。  
◆ナレーター、夫、妻

しかし、この彼女の「檻の中の理論」は、その檻に繋がれて廻っている彼の理論を、絶えず全般的な興奮をもって、殆ど間髪の隙間をさえも洩らさずに追っ駈けて来るのである。このため彼女は、彼女の檻の中で製造する病的な理論の鋭利さのために、自身の肺の組織を日日加速度的に破壊していった。

彼女の曾ての円く張った滑らかな足と手は、竹のように瘦せて来た。胸は叩けば、軽い張子のような音を立てた。そうして、彼女は彼女の好きな鳥の臍物さえも、もう振り向きもしなくなった。

彼は彼女の食欲をすすめるために、海からとれた新鮮な魚の数々を縁側に並べて説明した。

夫 「これは鮫鱈で踊り疲れた海のピエロ。これは海老で車海老、海老は甲胃をつけて倒れた海の武者。この鱈は暴風で吹きあげられた木の葉である」

妻 「あたし、それより聖書を読んでほしい」と彼女は云った。

彼はポウロのように魚を持ったまま、不吉な予感に打たれて妻の顔を見た。

妻 「あたし、もう何も食べたかないの、あたし、一日に一度ずつ聖書を読んで貰いたいの」

そこで、彼は仕方なくその日から汚れたバイブルを取り出して

読むことにした。

夫 「エホバよ わが祈りをききたまえ。願くば わが号呼の声の

御前にいたらんことを。わが窮苦の日、み顔を蔽いたもうなかれ。

なんじの耳をわれに傾け、我が呼ぶ日にすみやかに我に

こたえたまえ。わがもろもろの日は煙のごとく消え、わが骨は

焚木のごとく焚るるなり。わが心は草のごとく撃れて

しおれたり。われ糧をくらうを忘れしによる」

しかし、不吉なことはまた続いた。或る日、暴風の夜が開けた翌日、

庭の池の中からあの鈍い亀が逃げ去っていた。

## 二場 四

### ◆発作を起こす妻を介抱する夫。 ◆ナレーター、夫、妻

彼は妻の病勢がすすむにつれて、彼女の寝台の傍からますます離れることが出来なくなった。彼女の口から、痰が一分毎に始まった。彼女は自分でそれをとることが出来ない以上、彼がとってやるよりとるものがなかった。また彼女は激しい腹痛を訴え出した。咳の大きな発作が、昼夜を分たず五回ほど突発した。その度に、彼女は自分の胸を引っ掻き廻して苦しんだ。彼は病人とは反対に落ちつかなければならぬと考えた。しかし、彼女は、彼が冷静になればなるほど、その苦悶の最中に咳を続けながら彼を罵った。

妻 「人の苦しんでいるときに、あなたは、あなたは、他のことを

考えて」

夫 「まア、静まれ、いま呶鳴っちゃ」

妻 「あなたが、落ちついていいるから、憎らしいのよ」

夫 「俺が、今狼狽てては」

妻 「やかましい」

彼女は彼の持っている紙をひったくると、自分の啖を横なぐりに拭きとって彼に投げつけた。

彼は片手で彼女の全身から流れ出す汗を所を扱はず拭きながら、片手で彼女の口から咳出す啖を絶えず拭きとっていなければならなかった。彼の蹲んだ腰はしびれて来た。彼女は苦しまぎれに、

天井を睨んだまま、両手を振って彼の胸を叩き出した。汗を拭きとる

彼のタオルが、彼女の寝巻にひっかかった。すると、彼女は、蒲団を蹴りつけ、身体をばたばた波打たせて起き上ろうとした。

夫 「駄目だ、駄目だ、動いちゃ」

妻 「苦しい、苦しい」

夫 「落ちつけ」

妻 「苦しい」

夫 「やられるぞ」

妻 「うるさい」

彼は楯のように打たれながら、彼女のざらざらした胸を撫で擦った。

しかし、彼はこの苦痛な頂天に於てさえ、妻の健康な時に彼女から与えられた自分の嫉妬の苦しみよりも、寧ろ数段の柔かさがあると思った。してみると彼は、妻の健康の肉体よりも、この腐った肺臓を持ち出した彼女の病体の方が、自分にとってはより幸福を与えられていると云うことに気がついた。

夫 ——これは新鮮だ。俺はもうこの新鮮な解釈によりすがって  
いるより仕方がない。

彼はこの解釈を思い出す度に、海を眺めながら、突然あはあはと大きな声で笑い出した。

すると、妻はまた、檻の中の理論を引き摺り出して苦々しそうに彼を見た。

妻 「いいわ、あたし、あなたが何ぞ笑ったのかちやんと

知<sup>し</sup>つてゐるんですもの」

夫 「いや、俺<sup>おれ</sup>はお前<sup>まえ</sup>がよくなって、洋装<sup>ようそう</sup>をきたがって、ぴんぴんはしゃがれるよりは、静<sup>しずか</sup>に寝<sup>ね</sup>ていられる方が<sup>ほう</sup>どんなに有難<sup>ありがた</sup>いかなれないんだ。第一<sup>だいいち</sup>、お前<sup>まえ</sup>はそうしていると、蒼<sup>あお</sup>ざめていて、気品<sup>きひん</sup>がある。まア、ゆっくり寝<sup>ね</sup>ていてくれ」

妻 「あなたは、そう云<sup>い</sup>う人<sup>ひと</sup>なんだから」

夫 「そう云<sup>い</sup>う人<sup>ひと</sup>なればこそ、有難<sup>ありがた</sup>がって看病<sup>かんびよう</sup>が出来る<sup>でき</sup>のだ」

妻 「看病<sup>かんびよう</sup>看病<sup>かんびよう</sup>って、あなたは一言<sup>ふたことめ</sup>目<sup>め</sup>には 看病<sup>かんびよう</sup>を持ち出<sup>も</sup>すのね」

夫 「これは俺<sup>おれ</sup>の誇<sup>ほこ</sup>りだよ」

妻 「あたし、こんな看病<sup>かんびよう</sup>なら、して欲<sup>ほ</sup>しくないの」

夫 「ところが、俺<sup>おれ</sup>が譬<sup>たと</sup>えば三分<sup>さんぶんかん</sup>間<sup>かん</sup> 向<sup>むこ</sup>うの部屋<sup>へや</sup>へ行<sup>い</sup>つていたとする。すると、お前<sup>まえ</sup>は三日<sup>みっか</sup>も抛<sup>ほ</sup>つたらかさされたように云<sup>い</sup>うではないか、さア、何<sup>なん</sup>とか返<sup>へんとう</sup>答<sup>とう</sup>してくれ」

妻 「あたしは、何<sup>なに</sup>も文句<sup>もんく</sup>を云<sup>い</sup>わずに、看病<sup>かんびよう</sup>がして貰<sup>もら</sup>いたいの。いやな顔<sup>かお</sup>をされたり、うるさがられたりして看病<sup>かんびよう</sup>されたって、ちっとも有難<sup>ありがた</sup>いと思<sup>おも</sup>わないわ」

夫 「しかし、看病<sup>かんびよう</sup>と云<sup>い</sup>うのは、本来<sup>ほんらい</sup>うるさい性質<sup>せいしつ</sup>のものとして出来<sup>でき</sup>上<sup>あが</sup>っているんだぜ」

妻 「そりや分<sup>わか</sup>つているわ。そこをあたし、黙<sup>だま</sup>つてして貰<sup>もら</sup>いたいの」

夫 「そうだ、まあ、お前<sup>まえ</sup>の看病<sup>かんびよう</sup>をするためには、一族<sup>いちぞく</sup>郎<sup>ろう</sup>党<sup>とう</sup>を引<sup>ひ</sup>きつれて来<sup>き</sup>ておいて、金<sup>かね</sup>を百万<sup>ひやくまん</sup>円<sup>えん</sup>ほど積<sup>つ</sup>みあげて、それから、博士<sup>はかせ</sup>を十<sup>じゅう</sup>人<sup>にん</sup>ほどと、看護<sup>かんご</sup>婦<sup>ふ</sup>を百<sup>ひやく</sup>人<sup>にん</sup>ほどと」

妻 「あたしは、そんなことなんかして貰<sup>もら</sup>いたかないの、あたし、

あなた一人にして貰いたいの」

夫 「つまり、俺が一人で、十人の博士の真似と、百人の看護婦と、百万円の頭取の真似をしろって云うんだね」

妻 「あたし、そんなことなんか云ってやしない。あたし、あなたにじつと傍にいて貰えば安心出来るの」

夫 「そら見ろ、だから、少々は俺の顔が顰んだり、文句を云ったりする位は我慢しろ」

妻 「あたし、死んだら、あなたを怨んで怨んで怨んで、そして死ぬの」

夫 「それ位のことなら、平気だね」

妻は黙って了った。しかし、妻はまだ何か彼に斬りつけたくてならないように、黙って必死に頭を研ぎ澄しているのを彼は感じた。

## 二場 五

### ◆介抱に疲れる夫。 ◆ナレーター、夫、妻

しかし彼は、彼女の病勢を進めます 彼自身の仕事と生活のことを  
考えねばならなかった、だが、彼は 妻の看病と睡眠の不足から、  
だんだんと疲れて来た。彼は 疲れれば疲れるほど、彼の仕事が  
出来なくなるのは分っていた。彼の仕事が出来なければ出来ないほど、  
彼の生活が困り出すのも定っていた。それにも拘らず、  
昂進して来る病人の費用は、彼の生活の困り出すのに比例して  
増して来るのは明かなことであつた。然も、なお、いかなることが  
あろうとも、彼がますます疲労して行くことだけは事実である。

夫 ——それなら俺は、どうすれば良いのか。

夫 ——もうここらで俺もやられたい。そうしたら、俺は、  
なに不足なく死んでみせる。

彼はそう思うことも時々あつた。しかし、また彼は、この生活の  
難局をいかにして切り抜けるか、その自分の手腕を一度はつきり  
見たくもあつた。彼は夜中起されて 妻の痛む腹を擦りながら、  
夫 「なお、憂きことの積れかし、なお憂きことの積れかし」

と 呟くのが癖になつた。ふと彼はそう云う時、茫々とした  
青い羅紗の上を、撞かれた球がひとり飄々として転がって行くのが  
目に浮んだ。

夫 ——あれは俺の玉だ、しかし、あの俺の玉を、誰がこんなに  
出鱈目に突いたのか。

妻 「あなた、もっと、強く擦ってよ、あなたは、どうしてそう面倒臭がりになったのでしよう。もとはそうじゃなかったわ。もっと親切に、あたしのお腹を擦って下きったわ。それなのに、この頃は、ああ痛、ああ痛」

と彼女は云った。

夫 「俺もだんだん疲れて来た。もう直ぐ、俺も参るだろう。そうしたら、二人がここで呑気に寝転んでいようじゃないか」

すると、彼女は急に静になって、床の下から鳴き出した虫のような憐れな声で呟いた。

妻 「あたし、もうあなたにきんぎ我まを云ったわね。もうあたし、これでいつ死んだっていいわ。あたし満足よ。あなた、もう寝て頂戴な。あたし我慢をしているから」

彼はそう云われると、不覚にも涙が出て来て、撫でてる腹の手を休める気がしなくなった。

◆冬。医者に行く夫。  
◆ナレーター、夫、医者

庭の芝生が冬の潮風に枯れて来た。硝子戸は終日辻馬車の扉のようにながたがたと慄えていた。もう彼は家の前に、大きな海をひかえているのを長い間忘れていた。

或る日は彼は医者の所へ妻の薬を貰いに行った。

医者 「そうそう。もっと前からあなたに云おう云おうと

思っていたんですが」

と医者は云った。

医者 「あなたの奥さんは、もう駄目ですよ」

夫 「はア」

彼は自分の顔がだんだん蒼ざめて行くのをはっきりと感じた。

医者 「もう左の肺がありませんし、それに右も、もう余程進んで

おります」

彼は海浜に添って、車に揺られながら荷物のように帰って来た。

晴れ渡った明るい海が、彼の顔の前で死をかくまっている単調な幕のように、だらりとしていた。彼はもうこのまま、いつまでも妻を見たくないと思った。もし見なければ、いつまでも妻が生きているのを感じていられるにちがいないのだ。

◆ 帰宅する夫。妻が死について話す。  
◆ ナレーター、夫、妻

彼は帰ると直ぐ自分の部屋へ這入った。そこで彼は、どうすれば妻の顔を見なくて済まされるかを考えた。彼はそれから庭へ出て芝生の上へ寝転んだ。身体が重くぐったりと疲れていた。涙が力なく流れて来ると彼は枯れた芝生の葉を丹念にむしっていた。

夫 「死とは何だ」

ただ見えなくなるだけだ、と彼は思った。暫くして、彼は乱れた心を整えて 妻の病室へ這入っていった。

妻は黙って彼の顔を見詰めていた。

夫 「何か冬の花でもいらないか」

妻 「あなた、泣いていたのね」

と妻は云った。

夫 「いや」

妻 「そうよ」

夫 「泣く理由がないじゃないか」

妻 「もう分っていてよ。お医者さんが何か云ったの」

妻はそうひとり定めてかかると、別に悲しそうな顔もせず黙って天井を眺め出した。彼は妻の枕元の籐椅子に腰を下ろすと、彼女の顔を更めて 見覚えて置くようにじっと見た。

夫 「——もう直ぐ、二人の間の扉は閉められるのだ。」

夫 「——しかし、彼女も俺も、もうどちらもお互に与えるものは

与<sup>あた</sup>えてしまった。今<sup>いま</sup>は残<sup>のこ</sup>っているものは何物<sup>なにも</sup>もない。

その日<sup>ひ</sup>から、彼<sup>かれ</sup>は彼女<sup>かのじよ</sup>の云<sup>い</sup>うままに機<sup>き</sup>械<sup>かい</sup>のよう<sup>う</sup>に動<sup>うご</sup>き出<sup>だ</sup>した。

そうして、彼<sup>かれ</sup>は、それが彼女<sup>かのじよ</sup>に与<sup>あた</sup>える最後<sup>さいご</sup>の餞<sup>せん</sup>別<sup>べつ</sup>だと思<sup>おも</sup>っていた。

或<sup>あ</sup>る日<sup>ひ</sup>、妻<sup>つま</sup>はひどく苦<sup>くる</sup>しんだ後<sup>あと</sup>で彼<sup>かれ</sup>に云<sup>い</sup>った。

妻 「ね、あなた、今<sup>こんど</sup>度<sup>ど</sup>モルヒネを買<sup>か</sup>って来<sup>き</sup>てよ」

夫 「どうするんだね」

妻 「あたし、飲<sup>の</sup>むの、モルヒネを飲<sup>の</sup>むと、もう眼<sup>め</sup>が覚<sup>さ</sup>めずに

このままずっと眠<sup>ねむ</sup>って了<sup>しま</sup>うんですって」

夫 「つまり、死<sup>し</sup>ぬことかい？」

妻 「ええ、あたし、死<sup>し</sup>ぬことなんか一寸<sup>ちよつと</sup>も恐<sup>こわ</sup>かないわ。

もう死<sup>し</sup>んだら、どんなにいいかshれないわ」

夫 「お前<sup>まえ</sup>も、いつの間<sup>ま</sup>にか豪<sup>えら</sup>くなったものだね。そこまで行<sup>い</sup>けば、

もう人<sup>にんげん</sup>間<sup>ま</sup>もいつ死<sup>し</sup>んだって大<sup>だい</sup>丈<sup>じやう</sup>夫<sup>ぶ</sup>だ」

妻 「でも、あたしね、あなたに濟<sup>す</sup>まないと思<sup>おも</sup>うのよ。あなたを

苦<sup>くる</sup>しめてばっかりいたんですもの。御<sup>ご</sup>免<sup>めん</sup>なさいな」

夫 「うむ」

と彼<sup>かれ</sup>は云<sup>い</sup>った。

妻 「あたし、あなたのお心<sup>こころ</sup>はそりゃよく分<sup>わか</sup>っているの。だけど、

あたし、こんなに我<sup>わが</sup>ままを云<sup>い</sup>ったのも、あたしが云<sup>い</sup>うんじや

ないわ。病<sup>びやう</sup>氣<sup>き</sup>が云<sup>い</sup>わすんだから」

夫 「そうだ。病<sup>びやう</sup>氣<sup>き</sup>だ」

妻 「あたしね、もう遺<sup>ゆい</sup>言<sup>ごん</sup>も何<sup>なに</sup>も書<sup>か</sup>いてあるの。だけど、

今<sup>いま</sup>は見<sup>み</sup>せないわ。あたしの床<sup>とこ</sup>の下<sup>した</sup>にあるから、死<sup>し</sup>んだら見<sup>み</sup>て頂<sup>ちやう</sup>戴<sup>たい</sup>」

彼は黙って了った。

夫　——事實は悲しむべきことなのだ。それに、まだ悲しむべきこと

を

云うのは、やめて貰いたい

と彼は思った。

## 四場

◆冬の終わり。聖書の一節を読み聞かせる夫。  
◆ナレーター、夫、妻

花壇の石の傍で、ダリヤの球根が掘り出されたまま霜に腐って  
いった。亀に代ってどこから来た野の猫が、彼の空いた書齋の中を  
のびやかに歩き出した。妻は殆ど終日苦しきのために何も云わずに  
黙っていた。彼女は絶えず、水平線を狙って海面に突出している  
遠くの光った岬ばかりを眺めていた。

彼は妻の傍で、彼女に課せられた聖書を時々読み上げた。

夫 「エホバよ、願くば忿恚をもて我をせめ、烈しき怒りをもて  
懲らしめたもうなかれ。エホバよ、われを憐れみたまえ、  
われ萎み衰うなり。エホバよわれを医したまえ、わが骨  
わななき震う。わが靈魂さえも甚くふるいわなく。エホバよ、  
かくて幾その時をへたもうや。死にありては汝を思い出さぬ  
こともなし」

彼は妻の啜り泣くのを聞いた。彼は聖書を読むのをやめて妻を見た。

夫 「お前は、今何を考えていたんだね」

妻 「あたしの骨はどこへ行くんでしょう。あたし、それが気になるの」

夫 「彼女の心は、今、自分の骨を気にしている。」

——彼は答えることが出来なかった。

夫 ——もう駄目だ。

彼は頭を垂れるように心を垂れた。すると、妻の眼から涙が  
一層激しく流れて来た。

夫 「どうしたんだ」

妻 「あたしの骨の行き場がないんだわ。あたし、どうすれば

いいんでしょう」

彼は答への代りにまた聖書を急いで読み上げた。

夫 「神よ、願くば我を救い給え。大水ながれ来りて

我たましいにまで及べり。われ立止なき深き泥の中に沈めり。

われ深水におちいる。お水わが上を溢れ過ぐ。われ

歎きによりて疲れたり。わが喉はかわき、わが目はわが神を

待ちわびて衰えぬ」

## 五場

### ◆早春。スイトピーの花束が届く。 ◆ナレーター、夫、妻

彼と妻とは、もう萎れた一對の茎のように、日日黙って並んでいた。しかし、今は、二人は完全に死の準備をしてしまった。もう何事が起ろうとも恐がるものはなくなった。そうして、彼の暗く落ちついた家の中では、山から運ばれて来る水甕の水が、いつも静まった心のように清らかに満ちていた。

彼の妻の眠っている朝は、朝毎に、彼は海面から頭を擡げる新しい陸地の上を素足で歩いた。前夜満潮に打ち上げられた海藻は冷たく彼の足にからまりついた。時には、風に吹かれたようにさ迷い出て来た海辺の童児が、生々しい緑の海苔に迂りながら岩角をよじ登っていた。

海面にはだんだん白帆が増していった。海際の白い道が日増しに賑やかにになって来た。或る日、彼の所へ、知人から思わぬスイトピーの花束が岬を廻って届けられた。

長らく寒風にさびれ続けた家の中に、初めて早春が匂やかに訪れて来たのである。

彼は花粉にまみれた手で花束を捧げるように持ちながら、妻の部屋へ這入っていった。

夫 「とうとう、春がやって来た」

妻 「まア、綺麗だわね」

と妻は云うと、頬笑みながら痩せ衰えた手を花の方へ差し出した。

夫 「これは実に綺麗じゃないか」

妻 「どこから来たの」

夫 「この花は馬車に乗って、海の岸を真っ先に春を撒き撒きやって来たのさ」

妻は彼から花束を受けると両手で胸いっぱいに抱きしめた。

そうして、彼女はあの明るい花束の中へ蒼ざめた顔を埋めると、恍惚として眼を閉じた。

〈完〉

## Podcast のラジオ 好評配信中！



視聴・購読はこちらから  
<https://gekidannono.com>

ご意見・ご感想はこちらへ  
[radio@gekidannono.com](mailto:radio@gekidannono.com)

劇団ののでは、名作文学を声に出して演技し、収録した音声を Web 上で配信しています。複数名で読むラジオドラマタイプ、単独で読む朗読タイプなど、様々な形で朗読をしています。

みなさんも一緒に朗読を体験して楽しんでいただけるよう、本文に出てくる言葉や物語の解説も、公式サイト上で公開しています。

いつか国語の教科書で読んだ気がする、芥川龍之介・宮沢賢治・夢野久作など有名作家のあの作品やこの作品、ぜひ、役者の声でお楽しみください。

## 劇団ののと読む名作文学 横光利一 『春は馬車に乗って』 Podcast 版

発行日 令和 2 年 4 月 26 日

著 者 横光利一

編 集 劇団のの

発 行 劇団のの

[https://gekidannono.com/  
radio@gekidannono.com](https://gekidannono.com/radio@gekidannono.com)

※本文は、青空文庫様掲載の原文を加工したものです。

ゴシック体のルビは、原文に振られていたものです。

底本 『機械・春は馬車に乗って』新潮文庫、新潮社

初版 1969（昭和 44）年 8 月 20 日

図書カード URL

<https://www.aozora.gr.jp/cards/000168/card904.html>

